

はじめまして

加藤文子

はじめてのおいしさに出会った感動、その時のことを時々思い出す。

十九歳の夏、私は友人の暮らす西ドイツのカシュトロップ (Castrop) に滞在していた。リュックで向かったはじめてのヨーロッパである。

カシュトロップはルール地方の東部にあるかつての採炭都市で、こぢんまりとして落ち着いた街だった。オランダへも近く、行ってみようかアなんて言って日帰りで出かけたこともあった。

居候させてもらっていた友人のペロニカに連れられて、近くに住むハルロウ夫妻宅へよく遊びに行った。ペロニカと同世代の二人であった。

自分たちで二階の踊り場にホームバーを作ろうとしていた。勤務先から帰宅してから作業をするので、完成には時間がかかりそうだったが、プランを練ることや作ることそのものが楽しいのだと言っていた。



地下室にはビールやワインが並んでいたりと、ホームバーがあるのもこの国では特別なことではなさそうで、改めて異国に来ていることを実感したのだった。

ドイツ語がわからない私に、ペロニカは会話の合間をぬって内容を英語で伝えてくれる。三人が話に熱中するあまり、通訳を忘れられて私は待ちぼうけを食うこともあったが、訪問はいつも楽しかった。

居間でおしゃべりしていると、アイスクリーム売りの車がゆっくり巡回してくる。ベージュの車体には甘くてとろけそうなアイスクリームが浮かぶように描かれている。辺りで遊んでいた子供たちが走り寄って車を取り囲む。みんなの背中がワクワクしている。ハルロウたちも話を中断して買に出る。

間もなくアイスクリームを載せたコーンカップが運ばれてくるのだった。バニラやチョコ、いちごやチェリーだったり……。

アイスクリームを夢のような車で売りに来ることにも感心するのだったが、ひと口含んだ瞬間、その濃厚なおいしさはたとえようのないものだった。それまで私が口にしてきたものとは、かなりの隔たりがあった。こんなアイスクリームだったら、いつも食べていたいと思った。とはいえ日本でおいしいアイスクリームが普通に手に入るような時代がおとずれるのは、ずっと後になってからのことだ。私があんまりうれしそうにしていたせいか、四人が集まるところには大抵アイスクリー

ムがあった。

朝食は紅茶にカイザーロール、チーズやジャムやハチミツ、そしてヨーグルトだった。

三食の中でメインは昼食だった。近くの工場で働くお父さんも自宅で昼食をとった。食後しばらく新聞に目を通して、再び工場へ戻って行った。ジャガイモは毎食使われていたが、スープだったり肉と一緒に蒸して調味されたものなど、いろいろ工夫がなされていた。デザートに時々出されたホームメイドのチェリータルトは絶品だった。

夜はカモミールやミントなどのハーブティーに薄くスライスしたライ麦パンにハムやソーセージやレバーを添えてくれた。時には庭で採れたプチトマトやラディッシュなどの野菜も並んだ。

シンプルだけれど毎食おいしくて、体が喜んでいる、そんなふうに思えるのだった。

しつかりずしりしたドイツパンの香ばしいこと、ペロニカが日本にいた時、日本のパンはパンのように思えない、と言っていたのが頷ける。

ペロニカのお母さんが良質の食材を選択していたことも大いにあると思うが、パンをはじめ、ヨーグルトやチーズ、ハムやソーセージなど日常の食品の多くから実直さが感じとれた。同時に、思いの浅かった日本の食、伝統食について考えるきっかけを得ることとなった。

十代の私は紅茶といえばセイロンやアッサムくらいのものだと思っていた。実際は日本茶同様、茶葉そのものの鮮度へのこだわりはもとより、アールグレイのベルガモット、果物やバラなど花び

らの断片を程よくブレンドしたりと、多種多様であることを知った。

ハーブティーの存在、そして効用の奥深さも、どれもが新鮮な驚きだった。

時々メモの入ったバスケットとお金を渡されて、朝食用のパンのお使いをたのまれた。早朝から店を開けるには、何時から働いていたのだろうか。焼きたてをいただく至福のひと時も忘れられない。

居候させてもらったおかげで心豊かな人々のくらしに接することができた。

半世紀近く経た今も、数カ月の出来事は鮮明な記憶として心に刻まれている。

知らないことがたくさんあることを知った。シンプルであることの価値も知った。その時抱いた気持ちは遠くなったり近くなったりするのだけれど、決して消えそうにない。



ストケシア 幸せのおとずれ